



「読む力」についての一考察 (4)

— 作品と切り結ぶ楽しみ —

呉大学エクステンションセンター

深 川 賢 郎

■ 積極的な「読み」の大切さ

「読む」行為は、情報の収集という点において、「見る」「聞く」とは異質であり、きわめて重要な役割を果たしている。読み手は、文字や記号を媒介として自分の中に内容の構成やイメージを作り上げる。書き手の表現力（詳細な描写、的確なことばの選択、表現の分かりやすさなど）にもよるが、読み手は想像力（創造力）を生かして、述べられている情報をできるだけ正確に、しかも豊かに受け止めなければならない。

『本を読む本』¹⁾には次のように述べられている。『読む』という行為には、いついかなる場合でも、ある程度、積極性が必要である。完全に受身の読書などありえない。」このことは、読み手の想像力（創造力）を生かして、考えながら読む、イメージを形作りながら積極的に問いかけて「読む」ことの大切さを述べたものである。通説となっている解釈がくつがえされるのは、積極的に働きかける「読み」の結果である。作品と切り結ぶ積極的な読みを通じて、古典は、より深い意味を見せてくれる。そのとき、読者には表現を手堅く読み取る力、バランスの取れた判断力が求められる。このような「読み」を重ねることによって、文学作品は厚みを増し、私たちの読解力は向上していく。積極的な「読み」は、そういう意味で、作品にとっても読者にとっても大切な役割を果たすのである。

■ 清少納言は石女（うまずめ）だったか

積極的に作品に挑んだ文章として、田辺聖子著『文車日記』²⁾所収の「うまずめ」という随想をとりあげてみることにしよう。この文章は随想なので、あまり込み入った詮索をすることは適切でないかもしれない。しかし、これまで通説とされていた視点に対して彼女なりの着想が述べられているので、吟味してみる意味はあるだろう。そのことを通じて、読み手の意見（自由な発想）を提案しながら、主体的に読むことの楽しさを追って見たい。著者は次のように述べている。

「枕草子」の作者、清少納言という女性は、こんにちの研究では、結婚して、一子をあげたのではないかと推定されています。

しかし私は、彼女は石女（うまずめ）ではなかったか、あるいは子供を産んでも、手許から放してしまって、子供縁のうすい女ではなかったかと思っています。

田辺聖子さんの想像力は、清少納言についてこのようなイメージを形成している。このことを田辺さんは次のように説明している。

ふかがわ けんろう

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学エクステンションセンター

彼女は、赤ん坊や幼な子のやわらかな肌、愛らしい笑顔、声を、ものぐるおしいまで、飽かず賞（め）で、いつくしみます。

「ここるときめきするもの。ちご遊ばする所の前、わたる*。」

*『わたる』＝通り過ぎる

「つれづれなぐさむもの。三つ四つのちごの、ものをかしう**いふ。」

**『をかしう』＝心ひかれる、かわいらしい、愛らしい。

その片ことも、そのしぐさも、彼女にとってつきぬ愛執と、新鮮な好奇心をかきたてるものでした。

その愛情や執着、好奇心は、「ちご」たちが自分のものでないから、なのです。

自分で子供をもつ人は、決して、こういう第三者的な好奇心をもちますまい。清少納言の、愛情にあふれた観察は、いきいきしていればいるほど、ヒトの子供をみる女の目なのです。

さらに田辺聖子さんは次のように念を押している。

「その愛情には、自分の自由にできない、この愛らしいせつない生きものへの憧憬・羨望の影が、煙のように立ちこめています。」「子供のいやらしさ、にくらしさも鋭く指摘します。」「その直截的な辛辣さ、この口ぶりはもう、まるで男性のものです。」

こうした着想は彼女（田辺聖子さん）特有の感受性から発しているものなのかもしれない。普通の読者は、子どものしぐさが述べられているのを見て、無条件に「かわいい」と思うのが通例であろう。田辺聖子さんは、清少納言の表現に、無条件に肯定できないものを発見したのである。ここに、作家としての田辺聖子さんの醒めた感性をうかがうことができる。説得力もあり、着想も面白いが、なぜかためらいを感じる。人生経験の深さや、生活体験の積み重ね具合によって、賛否の分かれるところであろう。

『本を読む本』（上掲所）の著者によると、「文学では、はっきり述べられていることと同じくらいに、言外の意味がものをいう。隠喩の意味を理解するためには、行間を読まねばならない。作品としてまとまった詩や小説は、一つ一つのことば以上の何かを伝えるのである。」³⁾と述べている。文学作品の鑑賞のポイントは、作品の内容を読者が追体験し、没入するところにあるといわれている。表現の行間にこめられた含蓄を読み落としてはならないと思うが、過度に分析的で、批判的であることは、文学作品の読みの正道を踏みはず危険性がある。

田辺聖子さんのような着想が生まれる背景には、清少納言の感性がきわめてシャープであるという一般的な知識が加担しているに違いない。場面や行動の描写が、きわめて鋭い表現となっていて、ほのぼのとした叙情性に欠ける点もある。それらは、澄みきった水が青白くみえるように、伶俐な頭脳と冷やかさを感じさせている。

また、彼女が仕えた定子中宮に対する絶対的な尊敬と賞賛には目をみはるものがある。しかし、身分の低いものに対しては、人を人とも思わないような、露骨な蔑視があり、その差には歴然としたものが見られる。たとえば、『枕草子』⁴⁾の「似げなきもの」（似つかわしくないもの）として述べられているものに、「下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入りたるもくちをし。」という記述がある。みすばらしいあばら家に、真っ白な雪が積もったり、青い月の光が美しく注がれる草ぶきの屋根、それは、一般の大衆にとっても美しい風景であり、心を洗われる情趣をもたらすに違いない。「似げなきもの」とし、「くちをし」と述べている。身分の上下を問わず、すべての心ある人たちが受け止める、天然の贈り物への鑑賞や賛美を、ふさわしくないと表現している。

清少納言は受領の娘として生まれ、宮廷に仕えた。階級社会の中で形成された美意識は、洗練されて美しい。しかし、一方では、庶民に対する強い蔑視があり、高慢で鼻持ちならない印象をあたえている。

このように清少納言の感性は、自ずと違っている。母性の持つ、論理を超えた、無条件の優しさ、まろやかさは希薄である。田辺聖子さんは、こんなところに清少納言の冷たい性情をみたのであろう。あまりに理知に傾斜することは、母性の持つ献身的な優しさから遠くなるのが自然である。

しかし、このことをもって、清少納言が「うまずめ」であつたといっているのかどうか。これは、読

み手の主体性の問題である。田辺聖子さんが、作品の行間を深く読まれていることに異論を唱えるつもりはないが、私にはすこし、行き過ぎのような感じがする。

■ 「恋の手だれ」

イメージの形成も、伝統的な解釈をはなれてあまりに独創的になってくると、第三者に大きな戸惑いをおこさせる。田辺聖子著『文車日記』のなかから、もう一つの文章「むかしはものを」を取り上げてみたい。これは、百人一首の解釈である。

あひみての のちの心に くらぶれば むかしはものを 思わざりけり⁵⁾

これは、権中納言敦忠の歌である。「あひみる」は（相見、逢見）という文字をあてて、（特に、男女が互いに見るの意で）「男女が肉体関係を結ぶ。男女が深い契りを結ぶ。結婚する。」という意味である。

この歌は、「ある女と関係結んでからは、物思いにふけることが多くなり、考えてみると、以前は、これほど深刻に女のことを思うことはなかった。」という意味になる。問題はその「思う」という中身である。①恋しくてしきりに思う、②案外興ざめだったと思う、の二種類が考えられる。一般的には、①の意味に受け取られている。「仲が深まれば深まるほど、恋しさがつのり、あれこれと思いをよせていることが多い。」ということである。その女（男）を失いたくない、という要素もあるだろう。自分だけを思いつめてほしい、ということもあるだろう。恋の深みにはまった人間が、恋のとりことなって心乱れる姿を歌ったものと受け止められている。

ところが、田辺聖子さんは、②の受け止め方を述べている。

この男は、かねて恋い焦がれていた女と、とうとう恋の一夜をもつことに成功した。

朝まだき、彼は馬に騎ってか、あるいは牛車の奥深く身を隠してか、女のもとを去ってゆく。そのとき男の胸にあるのは、あながい、白けた思いかもしれない。恋の手だれ*であるこの男は、一つの恋がいま、はかなくうつろい、色あおざめ、しぼんだことに気づいたかもしれない。

*『手だれ』＝腕前がすぐれていること

というのである。「恋の手だれ」というと、多くの女性と交渉を持つドンファン、いわゆる「女遊びの達人」ということになるのだろう。恋多き男の胸には、女の人格や感性を弄ぶむきがあるのかもしれない。田辺聖子さんの述べるところをもう少し詳しく読んでみることにしよう。

あの女を望んで得られず、あんなに烈しく目もくらむ思いで、渴くがごとく欲していたとき、その気持ちは、今思えば、じつに浅はかで単純なものだった。あの女を得たいというだけでいっぱいだった。しかし、その欲望は燃えつき、充たされ、鎮められてしまった。たちまちの心がわり、とまではいわぬけれど、冷たい、水のような醒めた思いが、男の胸を充たし始めています。男は恋が生まれ恋が死ぬときの大きな動揺を感じています。この男にとって、女は思いのほか物足りぬ人だったのかもしれないし、また、いったん身を交わしたあとは、心ざまが急速に浅くなってゆく男の性（さが）のせいかもしれません。

この文章を読むと、田辺聖子さんは、恋愛と性欲の処理とを混同しているのではないかと考えてしまう。あるいは、彼女自身必死の恋を体験したことがないのではないかと、とも考えさせられる。いくら男が「恋の手だれ」であっても、男女の心の機微は、そんなに単純ではないだろう。

この歌のかなめとなる単語は「おもふ」にある。「おもふ」には、思う、想う、憶う、念う、などの文字が当てられる。この歌の「おもふ」は、心にかける、憂える、心配する、あるいは、思慮する、心に感じるなどに当たるものであろう。「おもふ」は「重い」の派生語と考える説もある。それほど、「おもふ」

の内容は複雑に入り組んでいて、整理のつかない、重いことがらなのである。

田辺聖子さんによると、「あの女を望んで得られず、あんなに烈しく目もくらむ思いで、渴くがごとく欲していたとき、その気持ちは、今思えば、じつに浅はかで単純なものだった。」とあるが、恋焦がれる心が、それほど「じつに浅はかで単純なもの」といえるだろうか。すくなくとも、「むかしはものを思わざりけり」という心境ではないだろう。

恋の獲得は、場合によっては命がけである。自分の全存在を傾けて打ち込むこともある。相手の心を獲得するまでは、乱れに乱れてなんの不思議もない。希望と不安が入り混じって、心は乱れるが、そのおくにはまだ獲得できていないものへの留保もある。しかし、いったん情交を経てからは、愛する人への思いは一筋になる。逢うたびに、相手のすばらしさを実感する。身も心も許しあった二人は充たされて、情愛もこまやかに深まる。自分だけがその人の相手でありたいという独占の願いも生まれるであろう。さらに大きな愛の充実を願うのも自然のなりゆきである。

「恋の手だれ」には、恋の始めも終わりも、それほど大きな心の振幅はないかもしれない。それならば、「冷たい、水のような醒めた思いが、男の胸を充たし始めています。」という心境を、「もの思う」と表現できるだろうか。醒めた男の心境は、いいかえると「女から逃げた心」である。空白になった心は決して「重く」はない。そのような心情を基盤として、文学は生まれないだろう。これらの点については、田辺聖子さんの解釈に、大きな疑問を覚えるところである。

ところで真実はどうであったのだろうか。歌の作者である権中納言敦忠は、意外にも、歌会などの折に、座興としてこの歌に、女の気持ちを詠んだものとも読める。「恋というものが、深みに入れば入るほど、当事者を悩み多い人にする」という常套句（トポス）をたくみに歌ったものかもしれない。歌はその場の社交や挨拶の道具でもあった。

たとえ、ゲームの中から生まれた作品であっても、多くの人々を感動させ、恋をする人の真剣な思いをこの歌から読み取っているかぎり、それはそれでよしとするべきであろう。

私は、①の解釈をとりたい。作品の内容を読者として追体験し、没入する、という読みを大切にしたいからである。

■ 「つれなかりける心」

これに似たような「あひみての のち」の心を歌ったものがあるので、あわせて味わってみよう。これは失われた恋の心である。

『平中物語』⁶⁾に次のような歌がある。

あひみての のちぞくやしきさまさりける つれなかりける心と思へば

「つれなし」という形容詞は、現在の意味とほぼ同じで、「相手が無情でこちらの気持ちにこたえてくれない。無情である。」という意味になる。この歌は、「つれなくなった」男を想い、「あいみた」ことを悔やんでいるのである。大切に守り続けた自分を、相手にゆるしたあと、通ってきてくれなくなった苦い思いをかみしめている。「あんな男を、相手にするのではなかった」という悔しい思いが迫ってくる。それは取り返しのつかない悩みであり、いまさらどうすることもできない。

「妻訪い婚」という、男性の側から訪れる形式の結婚であった当時としてみれば、女は泣き寝入りをして待つしかない。女性の立場が受身であった時代の痛切な思いである。百人一首の作品よりも、この「つれなかりける心」の作品のほうにリアリティーが感じられるのは、どうしようもない。「思い」の「重さ」には痛切な痛みが流れており、傷の深さは格段に違うからである。

「つれなかりける心」をうたった歌は、数多くある。それは、古典文学の主要なテーマでもあった。「失うまいと想う心」「待つことのつらさをかこつ心」は、それだけ「重く」苦しいものであった。そのつらさが壁となって人の前に立ちはだかるとき、人は自らを振り返り、思索し、生き方を耕す。そして、その心境は高められていく。このようにして文学（芸術）が生まれるのである。右大将藤原道綱の母によ

る『蜻蛉日記』⁷⁾は、ひたすらにこの心境を綴ったものである。一人の女が生涯を通じて、夫である兼家の「つれなかりける心」と格闘し、その苦悩を昇華しつつけた。そして、一つの作品をなした。それは今、千年の歴史に洗われ、日本古典の日記文学として、燦然と輝いている。「いのちは短し、されど芸術は長し」ということばを思い出す。

しかも、どうしたわけか夫の兼家のことを「恋の手だれ」と評した解説書や文献には、まだ出会っていない。

参考文献

- 1) M. J. アドラー C. M. ドレーン著：『本を読む本』講談社学術文庫 p.16 1997
- 2) 田辺聖子著：『文車日記』新潮文庫 pp.139～142 2003
- 3) M. J. アドラー C. M. ドレーン著：『本を読む本』講談社学術文庫 p.202 1997
- 4) 清少納言著：『枕草子』新編日本古典文学全集⑱ p.100 1997
- 5) 田辺聖子著：『文車日記』新潮文庫 p.22～25 2003
- 6) 作者未詳：『平中物語』新編日本古典文学全集⑫ p.473 1994
- 7) 藤原道綱の母著：『蜻蛉日記』新編日本古典文学全集⑬ 1995